欠けたることも

稲井　水帆

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どう足掻いても歴史は繰り返す。

目次

気泡　1
明滅　5
鳴動　9

気泡

「望月、今回の作戦なんだけど……。」
意味も無いし理由も無い絶望。
そんな得体の知れない波に呑まれる事、あるよな。
どうしようもない虚無と焦燥。
ちょっと気を抜くと、直ぐにコレだ。
「……そして、このエリアは特に警戒を……。」
そんな時、あたしはいつも一日前の事を思い出すようにしている。
怠惰を手に、無為な時間に埋もれる自分。死んだも同然な日々を無様に生き延びる自分。
大丈夫。あたしは死なない。死ぬわけがない。
だって、死人がこれ以上死ぬ事は無いから。
「……望月、ちゃんと聞いてる……？」
意識が現世に戻る。考えていると周りの事を気にしなくなってしまうのは悪い癖だ。

反省。

「はいはい、弥生姉。ちゃんと聞いてるよ。要するに『ちゃんと敵艦に注意しとけ』っつー話だろ?」

なんとなく耳に入っていた言葉を繋げて、その場を誤魔化そうとする。

「……ちゃんと聞いていなかったでしょ。」

「あっはは、バレたか。悪い悪い。」

「ちゃんと真面目に聞いて……。望月に何かあったら、私……。」

別にいいだろう、あたしが沈んだところで。

「あー。ごめんな、ちゃんと聞かなくて。」

裏表。心と口は別々の生命体だな。

「もう……。もう一回説明するから、今度は聞いてね……。」

「……と、いうことだ。では、今回の作戦、頑張ってくれ。」

司令官はそう言って締めくくると、執務室をそそくさと出ていった。

弥生姉から二度、司令官から一度。聞いてなかったのが悪いとはいえ、流石に同じ説明を三回もされては飽きるもの。

それでも最後まで説明を聞いたのは、聞かねば殺されるから。

司令官が〝司令官〟であり、あたしたちが〝艦娘〟だからだ。
〝司令官〟。艦娘を、その命を、道具として意のままに操る人間。巷では「捨て艦戦法反対」などと綺麗事を宣う若い提督もいるようだ。しかし、この戦いはそこまで甘くない。そんな戯言に耳を傾ける暇などない。

痛いほど鮮烈な黄金色の髪が、あたしの横でなびいている。
「この作戦海域、敵が強いって聞いたの……。怖いっぽい……。」
嘘だね、夕立。お前はいつも戦闘になると、一切の躊躇も無く敵艦を貪欲に殺すじゃないか。そうやって不安げな顔を演じて、周りの同情を誘うのはさぞ楽しいことだろうね。
いいか？艦娘が不安を感じることはあってはならないんだ。戦場に出ずに平和を貪る司令官が不安を感じないのに、どうして司令官の手足である私たちが不安を感じられようか。
そういうものなのだ。死を厭わない。厭う事は許されない。それが〝艦娘〟。道具としてのあたしたち。
斯く言うあたしも嘘つきだ。
一つ小さな深呼吸。心を落ち着かせる。仮面を被る。

言わなければならない嘘を言う。
「大丈夫だよ、なんとかなるって。」

明滅

果たして「望月」とは何だろうか?
眼鏡の駆逐艦?だらだらしている?……うん。確かに、それこそが「望月」だ。
では、質問の言い方を改めたらどうだろう。
果たして「あたし」とは何だろうか?

司令官の前で首を縦に振り続けていたのも、あたし。
『死にたくないから?死を厭う事は許されない筈でしょう?』
夕立の前で偽善者ぶって無根拠な励ましをしたのも、あたし。
『それがいい結果をもたらすと本気で思っているの?』
あたし、あたし、あたし、あたし。
『お前、お前、お前。』
認めたくない事実ばかりが目の前を塗り潰していく。
『認めなければいけない事実を眼前に叩きつける。』

……駄目だ。頭が、痛い。酷く痛い。何者かがあたしの頭を叩き割ろうとしている。
誰だか知らないけど、やめてくれ。
あたしは立たねばならないんだ、立っていなければならないんだ！
艦娘として、ひとりの人間として、「あたし」として……！
視界が酷く揺れる。ゆれて、しろく。
「もっちー？……もっちー！！大丈夫！？誰か！医務班を呼ぶっぽい！！」
大丈夫だ、大丈夫。あたしは此処に居る。まだ此処に。

気付くと、あたしは自室の布団で寝ていた。
……あぁ、倒れたのか。倒れたところを夕立か誰かが運んでくれたんだな。即座に状況を理解しようとする思考回路は、もはや職業病と言ってもいい。自嘲気味に笑う。
横には司令官。あたしと目を合わせると、わずかに笑みを浮かべた。
「……目が、覚めたみたいだね。」
「何も覚めちゃいないさ。」
「……少し、休むといい。次の任務、望月の代わりを卯月に務めてもらう。」
「……。」
寝返りをうち、司令官に背を向ける。大嫌いだ。司令官、あたし、世界、あらゆるも

のから目を背けたかった。

不甲斐ない。自分の無力さに打ちひしがれる。こんなの「死ぬのが怖いから逃げた」と言われてもおかしくないじゃないか。

……まぁ、あたしが出撃せずに卯月姉が代わるんだったら、艦隊は大丈夫だろう。あたしがいるよりも数段マシだ。卯月姉よりあたしの方が劣っている事くらい、自分で自覚している。

畜生。

「……望月？」

「うるさい。あたしはもう少し寝る。卯月姉に『望月がお礼とお詫びを伝えたがっていた』って言っといて。」

「分かった。とにもかくにも、今はゆっくり休むこと。いいね？」

「わーってるよ。あたしに命令すんな……。」

餓鬼みたいだな、あたし。何にも出来ないクセして、口だけは一丁前だ。

卯月姉が任務から帰ってきたら、どんな顔して会えばいいんだろう。布団に潜りこん

だあたしの頭は、それぱかりをぼんやりと取り留めなく考えていた。

鳴動

見えるのは無数の手。その全てが、あたしを指さしている。
聞こえるのは笑い声。憎しみも入り混じった、嘲笑の音。
感じるのは暗闇の冷やかさ。凍てつく空気が突き刺すようだ。
「お前さえいなければよかった」
「お前さえいなければ」
「あの時お前が」
「お前が」
「お前が」
「お前が」
「……ッ！」
飛び起きた。夢を、見ていた。
熟睡していたようだ。その割に、体は重りを付けられたかのように怠い。
眠い目をこすりながら、時計の時刻を見る。午前零時。
なぜこんな時間に起きてしまった……？

そこで初めて、辺りが騒がしい事に気が付く。
寝間着さえそのままに、あたしは自室を出た。灯りが強い方へ向かえば、騒乱の中心に行けるような気がした。
「……司令官?」
着いたのは母港だった。そこに見つけたのは、さっきあたしの部屋に居た顔。そして、帰投した艦娘たちの姿。
「望月……っ!」
「んあ、司令官?……どうしたのさ、そんなに慌てて……。」
刹那、状況を把握する。
出撃したのは四人。神通さんを旗艦として、夕立、弥生姉、それに卯月姉。
今この場に居るのも、あたしを除いて四人。司令官、神通さん、夕立、弥生姉。
あれ?
「卯月姉は何処に?」
「望月!」
司令官からの怒号。
……あぁ、そうか。心の何処かで理解していたが、やはりそうか。
「もしかして……。」

辺りを静寂が包んだ。
沈んだ、のか。
そっか、強い敵艦がいるって言っていたもんな。
突如あたしの中に、恐怖が巻き上がった。
敵艦に対する恐怖ではない。卯月姉が沈んだことに対する恐怖でもない。
「……望月？」
「あぁそっか、分かったよ。ごめんね、野暮な事聞いて。あたしは部屋に戻るよ。」
あたしが恐怖したのは、他でもないあたし自身だった。
卯月姉が沈んだのに涙一つ流すことが出来ないでいる、あたし自身への恐怖だった。
悲しいかと言われれば、確かに悲しい。だが、それ以上に「仕方のない事だ」「艦娘が沈むなんて当たり前だ」という思考が、悲しみの邪魔をする。
あたしが出撃していればよかったのかな。
そうしたら、自分と向き合わずに済んだのかな。
頭が痛いなんて言い訳を無視して、あたしが身代になっていればよかったのかな。
弥生姉に失望されたくないし、明日は泣いてみせよう。嘘泣きは得意なんだ。
大きく息を吸って、吐いた。
あたしは、どうして生かされているのかな。

あたしは。
あたしは。
あたしは？
「お前がいなければよかった」
「お前さえいなければ」
「あの時お前が」
「お前が」
「お前が」
「お前が」
夢を、見ていた。